

---

## 11. 女性と高齢者の自立をサポートする住まいづくり

女性と住宅研究会  
(大阪府吹田市)

---

### 1. 活動の背景と目的

既存の住宅設計は、ほとんどが専業主婦のいることを前提にしたつくりで、炊事、洗濯、掃除、アイロン掛け、収納作業、どれをとっても性別役割分担意識に基づいた女の仕事としての考えで設計されています。

一方、既婚女性の就業率は年々増加し、家事と仕事の両立に苦慮しスーパーウーマン症候群で倒れて夫に全面的に依存するか、男性と同じ仕事であっても責任が負えないということで安い賃金で我慢し、タダ働きの家事、育児、介護に人生の大部分を費やして経済的自立など夢のまた夢というのが現状です。

共働きの女性に一方的に家事の負担がかからない住まいを、との要望は今や無視できないところにきています。

また、経済的にも精神的にも自立したいと希望する若い女性も確実に増えています。しかしここでも、単身者向けの住宅には上質のものが少なく、シングル女性は常に「仮住まい」を余儀なくさせられているのが現状です。

高齢者の自立という観点でも、背景に大きな社会構造の変動があります。かつてのように、日本の伝統的美風だといって、老人介護を家族それも息子の嫁や娘にさせることが一般的だったが、高齢化の速度が急なため、社会全体で老人問題に対応しなければならなくなってきました。この際、各種の福祉政策と同時に、自ら努力して自立した生活ができるような「しかけ」が住まいに求められています。

女性と高齢者は、これまでのような依存体質から脱して、自尊心を持った人間らしい生き方をさぐっていかなければならないという点で、共通の課題を持っています。

住宅の設計、施工には主に男性が多くかかわっています。日常的に生活の場にはいない人間の思考には想像しか働きません。さらに無意識に男性中心の発想になり、深い部分での女性の思いを的確に掴むことは不可能です。高齢者対応住宅にしても、妻に長年サポートされてきて家庭生活で無能力者になってしまっている老人が独り暮らしが出来るためには、ハードな面だけ考えられても解決にはならないことがあります。

女性差別の構造解明に取り組んできたグループから、「住宅」を切り口にして、自分達の身近な問題を掘り起こし、女性だけでなく、男性にとっても高齢社会がみのりあるものになるよう提案していくことを目的として活動しています。

## II. 活動の内容 1995年4月～1996年3月

1994年2月にスタートした箕面コレクティブハウスは、最初、北欧型の共同居住型集合住宅を目指したが、敷地条件や箕面市条例からコープ住宅にならざるをえなかったが、この企画を発表してから後の反響が大きく、既成の住形態に不満を抱いていた人がたくさんいることがアンケート（60名）から判明したので、コープ住宅として土地の共同購入から各自希望の間取り、共有部分の考え、施工中の見学など参加者が10住戸の集合住宅建設にかかわったプロセスをビデオテープに記録した。

箕面コープ住宅建設の途中、建築専門家と施主、それも新しい発想の住み方に対して両者の意志疎通がうまくいかないことがおこり、この点での反省をふまえて、居住者自ら「住宅」に関する専門的な知識を習得するため、設計士を講師に迎え講座を開設し、1995年6月から半年間、毎週一回夜7時～8時半計24回の勉強会にした。

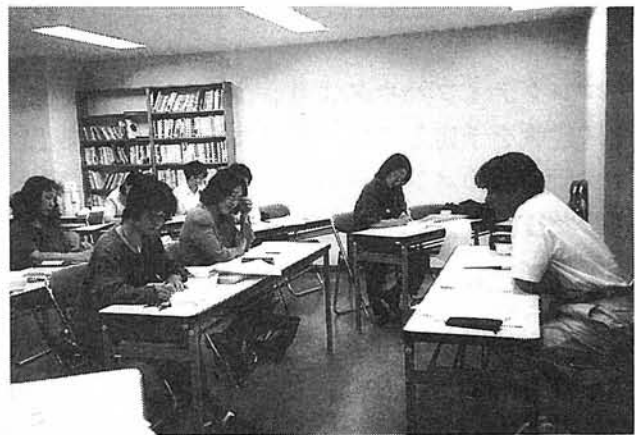
図面の読み方・描き方、建築方式と構造・耐震、建築材料学と部位、さらにパース・模型の作り方、住宅プランニングの実習など、むずかしい講義内容でした。

講座のタイトルを「ライフィング・デザイナー養成講座」として、建築技術論だけでなく生きる＝ライフにingをつけた造語にし、講座終了後は施主と建築家の間に立ってコーディネートが出来るような人材を養成したいとフェミニズム・カウンセリングなども加えた。

シニアハウス江坂が主催する「老後の住まい方を考える会」の企画に参加し、高齢者のニーズを本音で聞く機会を持って、ここでも「住まい方は生き方だ」が実感させられました。

最近、建築業界も、バリアフリーなど高齢者対応の住宅に関心を持つようになってきているが、精神面での独り立ちが危惧されることの問題に気づかない。二世帯住宅、三世帯住宅を大金かけて作っても、長寿時代には、世代間の軋轢が予想をこえておこる現実、普段の生活に密着していないプロの建築家には想像できないことだと思われま

人間関係の紡ぎ方や血縁に頼らない生き方、社会援助を権利として受け取れる強い精神力をつけるための方法として、グループ・カウンセリングを始めた。このことで私たちが目指しているコレクティブハウスの実現に一步でも近づくことが出来るのではと期待しています。



ライフィング・デザイナー養成講座



カウンセリングの一手法  
「自分史」づくりのよびかけ

1995年11月には、10日間の日程でドイツの「住」研修ツアーを実施、世界各地の住体験のある人々が口を揃えて誉めるドイツの住宅を、現地の人々との交流を通して体験できた。通訳を介して講演会やシンポジウムも開催し、一般家庭の暮らしぶりを生活者の視点で話しあった。また、この時期実施されたばかりの、ドイツ公的介護保険についての実態も分かり、帰国後さっそく高齢者問題を考える会の人たちに報告できました。

ドイツの高齢者施設を数多く見学しましたが、どこにも共通していえることは、赤レンガで作られた建物群がまわりの多くの緑に溶け込んで、美しい町づくりの一端を担っていることに、日本との比較で羨ましく感じました。

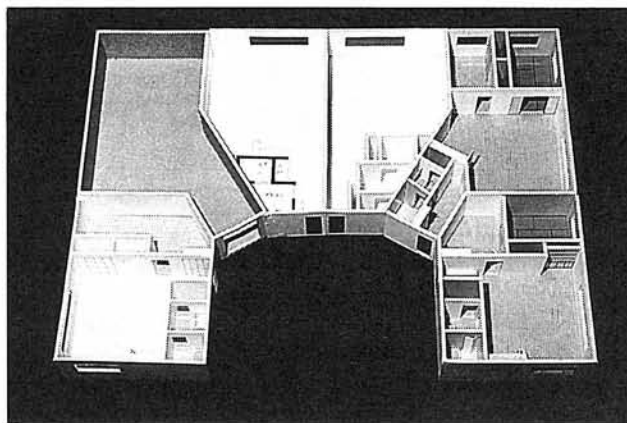


ドイツの老人ホーム

コレクティブハウスより、少し規模の小さい共同居住型集合住宅であるシェアード・ハウス建設を予定していて、具体的な話が進み出したのが10月になってからである。

当研究会のメンバーの一人が所有している交通の便利な都心の土地に、保育園をメインにした賃貸の協同居住型集合住宅建設として、具体的なモデルにして勉強会をしています。

働く女性のための住まいづくり、女の自立をサポートするためには、どんな”しかけ”が必要か、学んだ建築の専門知識を参考にして、さらに深く勉強しながら主体的に住まいづくりに取り組んでいます。



共同居住型集合住宅の模型

### Ⅲ. 活動の効果

箕面コレクティブハウス建設企画が紹介されると、建築関係や、40～50歳代の単身女性に大きな関心をよび、老後を想定し自立しつつも安心できる人間関係を求める人の多さに、私たちの活動の意義が確認できました。

高齢者からのアンケートやヒアリングでは、夫婦のみの世帯、ひとり暮らしの人の増加が、都市部に極端に多く、夜間人口の減少で、夜は非常に不安を感じるという訴えがあった。若い夫婦や幼児を持った世帯を身近に見なくなって活気も無くなりますという話にも実感がこもっていました。

歴史的にも都市は、人々の営みに快適さを提供してきた筈なのに、近年、都市は女、子ども、年寄りを排除して、効率を最優先してきたことが、人間らしさを失った生活空間にしてしまったといえます。

経済的に有利だということで、幸福だと感じる時代ではもはやありません。男性中心思考が問題を内蔵させていることを私たちの活動が指摘してきました。「住まい」を女性の視点で研究する意義がここに認められたと確信します。

### Ⅳ. 今後の課題

女性の立場から、住まいとコミュニティについての企画を提案し続けていますが、行政や企業一般の施主など決定権をもつ人たちが、男性か、男性思考を内面化した女性なので理解してもらうことが困難です。

では、市民活動家はどうかというと、リーダーに男性が多いことと、長年男性主導で活発に闘争スタイルでやってきた経験があるせいか、女性といえども生活者の視点がないなど、立場の違いがあって市民運動にも積極的に加わりにくい。

著名な活動家ほど、抜きがたい男性優位意識が強く、弱者の立場にたって発言しているという正義感だけはあっても、主に女性が担わされている社会的再生産のための無報酬労働（家事、育児、介護）は社会的な抑圧機構だという認識が徹底していません。

最近、家庭人、地域人としての役割に目覚めた男性が職業人生で培った知識と経験を生かし住みやすい街づくりに参加しようという気運が盛り上がっていますが、街の景観や環境問題、公的施設建設のような目に見えやすいことにエネルギーを発揮しがちです。

本当に家庭人として生きやすい場を考えるには、女性を縛っている家事、育児、介護を日常的に体験し人間の生活の基本の部分でどんな問題があるか、観察する必要があります。

住まいの「しかけ」いわゆる設計について、これまでの社会通念を洗い直し、「家族」という概念も今後変化することを予感しつつ、あたらしい「生き方」「住まい方」を創出し、提案を続けるつもりですが、ここに柔軟な思考の男性が加わることで、きたるべき高齢社会を乗り切っていけると思います。